

高野山と比叡山の会社墓

中 牧 弘 允

- 一 問題の所在
- 二 会社墓と会社供養塔
- 三 供養塔建立誌の分析
- 四 会社の追悼儀礼
- 五 今後の課題

論文要旨

日本の会社は社葬や物故社員の追悼儀礼をおこなうだけでなく、会社自体の墓をもっているところがある。このような墓は会社墓とか企業墓とよばれ、高野山と比叡山におおくみられる。本稿は高野山の会社墓一〇三、比叡山の会社墓二三をとりあげ、その基礎的なデータを提出するとともに、今後の課題を提示することを主な目的としている。

会社墓には創業者の墓や物故従業員の供養塔がたてられている。本稿では、とくに物故従業員の供養塔に焦点をあて、その歴史をあとづけるとともに、名称や形態の分析をこころみている。さらに、関西に集中する会社や組合の地域

的ひろがりや、その業種にも言及している。

会社供養塔には建立誌が付随することが多い。そうした建立誌を対象に、その趣旨を七項目に分類し、分析をおこなっている。その項目とは、①建立の契機、②会社祭展（先人）に対する感謝、③先人の霊供養、④会社祭展に対する祈願、⑤安全祈願、⑥顧客への感謝、⑦高野山や比叡山の贊美である。

会社供養塔にかかわる物故者追悼儀礼については、コクヨと千代田生命の事例をとりあげ、若干の比較をこころみている。

一 問題の所在

日本には墓や供養塔をもっている会社がある。それは関西の企業におおく、高野山や比叡山に集中している。本稿は、高野山と比叡山における会社墓の歴史とその祭祀の実態について、基礎的なデータを提出するとともに、今後の研究の方向をさぐることを目的としている。

会社は利潤を追求するひとつの営利団体であるが、それが会社のすべてではない。会社は資本の論理にしたがっているのは事実であるけれども、また別の論理によってもうごかされている。とくに日本では、会社は営利を追求しているようにみえても、他方では会社員とその家族の生活をささえる拠点という認識がつよくはたらいっている。会社の活動を経済に還元せず、非経済的次元でとらえかえすことにより、会社ならびにそれをとりまく社会の性格について、あらたな認識をふかめることができよう。

実際、日本の会社の経済活動には宗教の関与する余地が多分にある。たとえば、会社が主催して神仏や物故者をまつる風習がみられる。日本の会社は社運の隆昌と事業の安全を祈願するため、神社を建立し、定期的な祭祀をおこなっている⁽¹⁾。それは大企業におおく、本社ビルの屋上にちいさな社祠をたてたり、地元⁽²⁾に壮大な社殿を建造したりしている。神社に物故者の霊をまつり、慰霊祭をおこなうところもあれば、関連グループ全社の事業報告を祭文にこめて奏上するところもある。

会社の社長や会長が死亡すれば、葬儀はふつう社葬としておこなわれる。会社の在職物故者にたいしては、まとめて追悼法要や慰霊祭がとりおこなわれる。それは神式よりも仏式がおおく、毎年の恒例行事としている会社はすくなくない。定年退職後の物故社員をその列にくわえる会社もある。また、会社に先人の供養碑を建立したり、高野山や比叡山などの聖地に社長の墓や物故従業員の供養塔を造立したりする会社もある。この報告では、高野山と比叡山に墓や供養塔をもつ会社をとりあげる。なぜなら、高野山には一〇〇をこえる会社供養塔がきそうように建立され、比叡山にも二〇以上の法人墓が存在するからである。会社墓に関しては、高野山が日本最大のセンターであり、比叡山がそれに次いでいる。

一 会社墓と会社供養塔

(一) 範囲と名称

会社とは、商法第五十二条によると「商行為を為すを業とする目的をもって設立したる社団」のことであり、「営利を目的とする社団にして：商行為を為すを業とせざるも之を会社と看做す」とある。商法上の会社は、前者の商事会社と後者の民事会社（みなし会社）の総称である。そして会社は合名会社、合資会社、株式会社⁽³⁾の三種とすることが五十四条でさだめられている。さらに有限会社もある。しかし、本稿の対象とする「会社」は商法や有限会社法の会社に限定されるものではない。保険業などの相互会社はもとより、協同組合や同志的集団のように商行為や

表1 高野山の会社墓(建立年順)

会社名	建立年月日	名称	形態	墓誌	霊標	社長墓	名刺受	備考	所在地
1 北尾新聞鋪	一九七・九	物故店員之墓	五輪塔	○		家			奥の院
2 松下電器産業(株)	一九六・九	物故者墓(供養塔)	角塔			家	○		奥の院
3 大阪小林薬学実験所	一九九・一	同所員累代精霊	角塔						奥の院
4 丸善石油(株)	一九二・一	関係物故者供養塔	五輪塔						奥の院
5 久保田鉄工(株)	一九三・八	久保田権四郎翁墓誌*		○		個人		*叙勲等顕彰の墓誌 小田原大造顕彰碑	奥の院
6 大阪瓦斯(株)	一九五・八	物故従業員供養塔	宝篋印塔	○					奥の院
7 和泉紡績(株)	一九三・三	縁故者供養塔	五輪塔						奥の院
8 富士車輜	一九三・六・二六	物故者供養塔	角塔			家			奥の院
9 南海電気鉄道(株)	一九三・八	供養塔	宝塔						奥の院
10 京都宮坂鉄工所	一九三・六	供養塔	宝篋印塔					交通事故物故者諸精霊供養塔	奥の院
11 藤井毛織(株)、関連会社	一九五・一	墓、物故従業員之霊	五輪塔			家のみ			奥の院
12 写真真業界	一九五・五	先賢万霊之碑	円筒形		○				奥の院
13 大阪黒瀬鉄工所	一九五・六・一					家のみ			奥の院
14 日産自動車(株)	一九五・九	物故従業員慰霊碑	銅像	○					奥の院
15 江崎グリーコ(株)	一九七・十	従業員物故者墓	角塔	○		個人			奥の院
16 西島製作所	一九八・八	供養塔	宝塔	○		個人	○		奥の院
17 三宝伸銅工業(株)他二社	一九〇・一三	供養塔	宝塔	○		個人			奥の院
18 (株)千日絵本社	一九二・七	供養塔	宝塔	○		個人			奥の院
19 シャープ	一九二・八	供養塔	洋型	○		個人			奥の院
20 大阪港区マツダ木材店	一九三・二	供養廟		○		個人			奥の院
21 フロインド製菓(株)	一九三・八	供養塔	角塔	○		家のみ			奥の院
22 栗本鉄工所	一九三・八	供養塔	五輪塔	○			○		奥の院
23 ヤクルト	一九四・二・二	物故者各霊菩提	縦形	○					奥の院

会 社 名	建 立 年 月 日	名 称	形 態	墓 誌	霊 標	社 長 墓	名 刺 受	備 考	所 在 地
24 和歌山湊組関連企業	一九四・四	物故社員墓所	五輪塔	○			○		奥の院
25 千代田生命	一九四・四十五	先人之碑	五輪塔						奥の院
26 光洋精工(株)	一九五・八	慰霊碑	ペアリンド						奥の院
27 紙器業並に関連業界	一九七・九	物故者諸霊奉安御所	五輪塔						奥の院
28 三光汽船(株)	一九六・十一	慰霊碑	洋型	○					奥の院
29 松下冷機(株)	一九九・二	物故者之墓(慰霊碑)	角塔	○				吉田市の助顕彰碑	奥の院
30 (株)名村造船所	一九九・九	有縁物故者慰霊碑	自然石	○				社名変更	奥の院
31 仁丹	一九九・九	供養廟	自然石	○					奥の院
32 南海汽船(株)	一九九・一	供養塔	宝塔	○					奥の院
33 新明和工業	一九九・一五	慰霊碑	五輪塔	○					奥の院
34 (株)藤田酒販	一九九・一・三九	供養塔	アポロ11号					南海丸遭難供養物故者供養塔	奥の院
35 (株)紀州農園	一九七〇	供養塔	十三層塔						奥の院
36 柏原機械製作所	一九七〇・十二	物故従業員慰霊碑	角塔						大霊園
37 しろあり対策協会	一九七・四七	慰霊碑	自然石						奥の院
38 (株)北海鉄工所グループ	一九七・六	物故者慰霊塔	五輪塔						大霊園
39 小島集団	一九七・七十一	物故者供養塔	宝篋印塔						大霊園
40 (株)興紀相互銀行	一九七・八十七	物故者慰霊碑	五輪塔	○					奥の院
41 高尾企業	一九七・八	従業員墓所	一石五輪塔						奥の院
42 中谷関連会社	一九七・五	物故者慰霊碑(供養塔)	宝塔						大霊園
43 東洋紙業(株)	一九七・九・三三	物故者供養塔	宝塔						奥の院
44 明和住宅・山洋住宅	一九七・十一	慰霊碑	五輪塔			家	○ ○		奥の院
45 中野組石材工業(株)	一九七・十一	従業員物故者供養塔	縦形						奥の院
46 (株)樫村	一九七・春彼岸	無	五輪塔						大霊園
47 三和電気土木工事(株)	一九七・四・一	慰霊塔	五輪塔	○					奥の院
48 (株)清水商店	一九七・六	慰霊碑(供養碑)	洋型	○					大霊園
49 住江織物(株)	一九七・七	物故者墓所	六角塔	○					奥の院

50 P A R I S (龍井株式会社)	一九三三	供養塔	五輪塔	○				大霊園
51 東洋ゴム工業株式会社	一九三三・八一	供養塔	五輪、宝篋	○				奥の院
52 大阪印刷関連団体協議会	一九三三・八・三	大阪印刷産業人物故者納骨塔	円墳五輪塔	○	○		カプセル	大霊園
53 若松電気工業所	一九三三・三	物故者墓所	五輪塔	○	○	家		奥の院
54 鶴屋株式会社	一九三三・春彼岸	慰霊碑	角塔	○	○	家のみ		奥の院
55 佐々木工業株式会社	一九三三・七	物故者慰霊塔	五輪塔	○	○			大霊園
56 コクヨ	一九三三・八・三	物故者慰霊塔	五輪塔	○	○			大霊園
57 和歌山県商工信用組合	一九三三・九・九	物故者慰霊塔	五輪塔	○	○			大霊園
58 日本化学工業株式会社	一九三三・三・二	墓所	五輪塔	○	○	家		奥の院
59 大和ハウス工業株式会社	一九三三・八・九	慰霊塔	五輪塔	○	○			大霊園
60 株式会社紀陽銀行	一九三三・九・九	物故者供養(慰霊)塔	五輪塔	○	○			奥の院
61 兵庫県漁業協同組合連合会	一九三三・四	漁友鎮魂之塔、漁民共同慰霊塔	縦形	○	○			奥の院
62 全国建設専門工事業団体連合会	一九三三・四	土木建築殉職者之墓(建士之墓)	角塔	○	○			奥の院
63 株式会社小松製作所	一九三三・五・三	慰霊碑	洋型	○				奥の院
64 京都五條寝具株式会社	一九三三・五	物故者慰霊塔	一石五輪塔		○	家のみ		奥の院
65 株式会社内崎商会	一九三三・五	慰霊塔	五輪塔		○			奥の院
66 読売新聞販売人	一九三三・五	先人の碑	洋型	○				大霊園
67 キヤノン	一九三三・七	物故者供養塔	五輪塔	○				奥の院
68 浅野歯車工作所	一九三三・一	大阪府和歌山県物故者イオンズ慰霊碑	洋型					大霊園
69 ライオンズクラブ国際協会	一九三三・二	物故者慰霊塔	五輪塔	○				大霊園
70 ミノルタカメラ株式会社	一九三三・二	慰霊塔	宝塔	○				大霊園
71 そごう	一九三三・七・三	安霊塔(慰霊碑)	宝塔	○				奥の院
72 大阪府石材事業協同組合	一九三三・八・一	供養塔	五輪塔	○				奥の院
73 麒麟麦酒株式会社	一九三三・一			○				

会社名	建立年月日	名称	形態	墓誌	霊標	社長墓	名刺受	備考	所在地
74 全国審関連業者	一九一九	物故者慰霊塔	宝篋印塔	○	○				大霊園
75 溝端紙工印刷㈱、関連各社	一九一九	物故者慰霊塔	宝塔	○	○				大霊園
76 ㈱中山製鋼所	一九二二・三	物故者供養塔	五輪塔	○	○				大霊園
77 興農合作社	一九二一	同志之碑	角塔	○	○				大霊園
78 ㈱盛工務店	一九三〇	慰霊塔	宝篋印塔			家			大霊園
79 大師陀羅尼製菓	一九三七	供養塔	五輪塔	○					大霊園
80 アジア航測グループ	一九三九・三	慰霊碑	三角点						奥の院
81 ニッタ㈱他、関係各社	一九三三	物故者慰霊塔	五輪塔			家	○		奥の院
82 日本臓器製菓㈱	一九四三	供養塔	五輪塔			家			奥の院
83 中本名玉堂	一九四四・五	墓所*	角塔			家		*転墓	奥の院
84 吉田自動車工業㈱、吉田輸送㈱	一九四四・五	慰霊塔	五輪塔	○			○	錯	奥の院
85 寺岡造船㈱	一九四一	物故者供養塔	五輪塔	○					大霊園
86 名古屋市丸高㈱	一九五九	慰霊塔(先人之碑)	五輪塔	○					奥の院
87 松下電子応用機器㈱	一九五九	慰霊塔	五輪塔	○					奥の院
88 丸正百貨店	一九五九・三	有縁物故者供養廟	宝塔、家型	○		家のみ			大霊園
89 小林製菓㈱	一九五七・一	供養塔	五輪塔	○					奥の院
90 藤田土地㈱	一九六三	供養塔	五輪塔	○					奥の院
91 浜崎水産㈱	一九六三	供養塔	五輪塔	○					奥の院
92 河内精機㈱	一九七五	物故者供養塔(慰霊塔)	五輪塔	○					大霊園
93 センコー㈱	一九七七・一	供養塔	五輪塔	○					大霊園
94 和泉化成㈱	一九七八	供養塔	一石五輪塔			家	○ ○		奥の院
95 スバル興業㈱	一九七八	供養塔	五輪塔						奥の院
96 花谷建設工業㈱	一九七〇	供養塔	五輪塔			家			奥の院
97 雅興産	一九七八	雅興産並関連企業物故社員供養塔	五輪塔			家	○		奥の院

会社名	建立年月日	名称	形態	墓誌	霊標	社長墓	名刺受	備考	所在地
1 東光商事株式会社	一九六八	慰霊塔	五輪塔	○					解脱い
2 株式会社滋賀銀行	一九六十一・三	物故者慰霊塔	五輪塔	○	○				光明と
3 佐川急便グループ	一九六六	供養塔	宝塔	○			○		解脱ろ
4 大織(だいおり)福祉協力会	一九六七	慰霊塔	十三層塔	○					解脱ろ
5 大三織物株式会社	一九六〇・五	供養塔	宝塔	○			○		蓮華い
6 株式会社大阪銀行	一九六〇・九	慰霊塔	五輪塔	○			○		光明い
7 佐々木工業株式会社	一九六二	永代供養塔	五輪塔	○	○	○	○		光明ほ
8 九大食品株式会社	一九六三・六	供養塔	五輪塔	○	○		○		光明い
9 丸松株式会社	一九六四・九	無	五輪塔				○		光明い
10 国華産業株式会社	一九六三	慰霊塔	五輪塔	○	○				解脱に
11 株式会社森組	一九六九	慰霊塔	五輪塔	○			○		光明い
12 大阪船場繊維卸商団地共同組合	一九七三・九	先賢慰霊之碑	縦形	○					功徳は
13 高山株式会社	一九七二	永代供養塔	五輪塔	○			○		解脱に

表2 比叡山延暦寺大霊園の会社墓(建立年順)

- * 会社名の番号は地図と対応している。
- * 名称は会社供養塔の名称であり、家墓のみの場合には名称を記入していない。
- * 形態は会社供養塔の形態であり、社長ないしその一族の墓の形態ではない。
- * 社長墓の欄における家は家墓、個人は個人墓の意である。

98 福川建設株式会社	一九六八・三	慰霊碑	洋型						大霊園
99 吉富製薬株式会社	一九六〇・八	有縁物故者慰霊塔	五輪塔	○					奥の院
100 南海化学工業株式会社	一九六〇・十	供養塔	五輪塔	○					奥の院
101 松下興産株式会社並関連会社	一九六〇・十	物故者之墓(慰霊塔)	角塔				○		奥の院
102 築野食品工業株式会社	一九六六	物故従業員供養塔	五輪塔				○		奥の院
103 株式会社それいゆ 大吉住宅、大吉建設	一九六六				○	家のみ	○		奥の院

会社名	建立年月日	名称	形態	墓誌	霊標	社長墓	名刺受	備	考	所在地
14 榑三星堂	一九八十一	物故者慰霊塔	五輪塔	○			○			解脱に
15 廣瀬商事榑	一九九三	勝縁塔	五輪塔			○				解脱は
16 榑ダイヘン	一九九十一	物故者慰霊之碑	洋型							蓮華へ
17 東洋建設榑	一九九十一	先人の碑	五輪塔	○						蓮華へ
18 埠頭興業榑	一九九二	供養塔	五輪塔	○						光明ほ
19 積水化学工業榑	一九九三	先人の碑	縦形	○						光明と
20 黒田電気榑	一九九六	供養塔	宝塔	○	○	○	○			光明ほ
21 榑ドンク	一九九六	先人長敬の碑	自然石	○						解脱い
22 旭榑	一九九十一	物故者供養塔	五輪塔	○						光明と

* 会社名の番号は地図と対応している。

* 名称は会社供養塔の名称であり、形態は会社供養塔の形態である。

営利に準じる活動をしている団体、さらにライオンズクラブのような関連の親睦団体などもふくまれる。社長およびその一族の家墓のみであっても、会社名や店名の表示のあるものは除外しなかった。ただし、各種の学校や家元制度の流派は、営利をもとめないわけではないが、教育・教養を主目的とするので、本稿の対象外とした。⁽²⁾

このような基準にもとづいて高野山と比叡山の会社関連の墓を列举すると、表1・表2のように、一九九二年五月の高野山には一〇三(奥の院が七五、大霊園が二八)、一九九一年七月の比叡山には二三(横川が一、大霊園が二二)、計一二六となる⁽³⁾。これらの墓のことを高野山では「会社墓」とか「企業墓」と通称している。比叡山では「法人墓」「法人

墓地」「法人霊地」が公称であるが、「会社墓」という呼称も使用されている。このように、いまだ会社関連の墓に対する統一的な名称はない。概念上、「法人墓」は「会社墓」を包摂する上位概念であるが、学校法人などをふくんでいる。したがって、本稿では、会社があくまでも中心であるし、墓石にも株式会社をはじめとする「会社」の文字のほう「企業」のそれよりもはるかに使用頻度がたかいので、以後「会社墓」という名称を使用することにしたい。

ところで、実際の会社墓を構成するものは塔や碑のほかに、墓誌、霊標、名刺受、燈籠、仏像、卒塔婆、手水鉢、荷物台、植栽、玉垣、四阿^{あずまや}などである。その中核となる塔や碑の名称はかなり多様である。表3を

表3 名称の分類

	高野山			比叡山			総計
	奥の院	大霊園	小計	横川	大霊園	小計	
慰霊	20	20	40	1	9	10	50
供養	33	7	40	0	9	9	49
先人	1	1	2	0	3	3	5
先賢	1	0	1	0	1	1	2

*名称が重複している場合もかぞえている。

廟の前にも同様に、供養、物故者、物故店員、物故社員、有縁物故者などの文句がつく組み合わせもある。先人とか先賢という表現をつかって、先人之碑、先人畏敬の碑、先賢万霊之碑、先賢慰霊之碑と形容したものもある。表3によると、先人は五例、先賢は二例がみられる。例外的には、安霊塔、勝縁塔、納骨塔、鎮魂之塔、同志之碑、殉職者之墓などがある。このように塔や碑に関しては、画一的な名称はない。そこで本稿では便宜上、「会社供養塔」という名称を総称として採用することにした。その理由は、供養塔ときざまれた事例がいちばんおおいからであ

みると、「供養」と「慰霊」の使用頻度にはほとんど差がない。表1・表2の名称の欄をみると、もっとも一般的なのは供養塔(四四例)であり、それにつぐのが慰霊塔(二九例)である。塔に関しては「供養」が「慰霊」をうわまわる。しかし、碑の場合は、どういふわけか慰霊碑ないし慰霊之碑がおおく(二〇例)、供養碑はわずか一例にすぎない。塔や碑には供養や慰霊のほか、物故者、従業員、物故者、物故従業員、有縁物故者、縁故者、あるいは永代などの文字がつく場合がすくなくない。墓、墓所、

る。

(二) 供養塔建立の歴史

比叡山と高野山は日本を代表する仏教の中心地である。比叡山は最澄(伝教大師)、高野山は空海(弘法大師)によって開山され、それぞれ天台宗と真言宗の総本山であることはいうまでもない。比叡山と高野山を比較すると、前者が学問仏教の最高学府であったとすれば、後者は庶民仏教の最大聖地であった。そのため比叡山は「仏教の母山」とよばれ、高野山は「日本総菩提所」とうたわれる。そうした性格の相違は、墓地の形態にも如実にあらわれている。比叡山には伝教大師の廟や僧侶の墓はあっても、在家の墓地はなかった。これに対し、弘法大師廟のある高野山奥の院では、古代末期以来の納骨・納髪や塔婆供養の風習がいまでもさかんである。そればかりか奥の院につらなる旧参道の両脇には、大名供養塔(大名墓)をはじめとする無数の墓石群が鬱蒼とした木立のなかに林立している(写真1、写真2)。現存する最古の墓石は平安末から鎌倉初期の五輪塔の残欠であり、墓石数は二〇万をこえるといわれている。

高野山奥の院の会社墓は一の橋を起点とする参道のなかにも点在するが(図1)、東側に位置する公園墓地(約一万坪)における威容がめだつ(図2)。この公園墓地は戦後、戦没者をまつる英霊殿の完成にともない、あらたに造成されたものである。また一九六九年には隣接の山斜面に約二万坪の総本山金剛峯寺高野山大霊園(以下、高野山大霊園)が



写真2 加賀藩二代藩主前田利長の供養塔



写真1 高野山奥の院参道

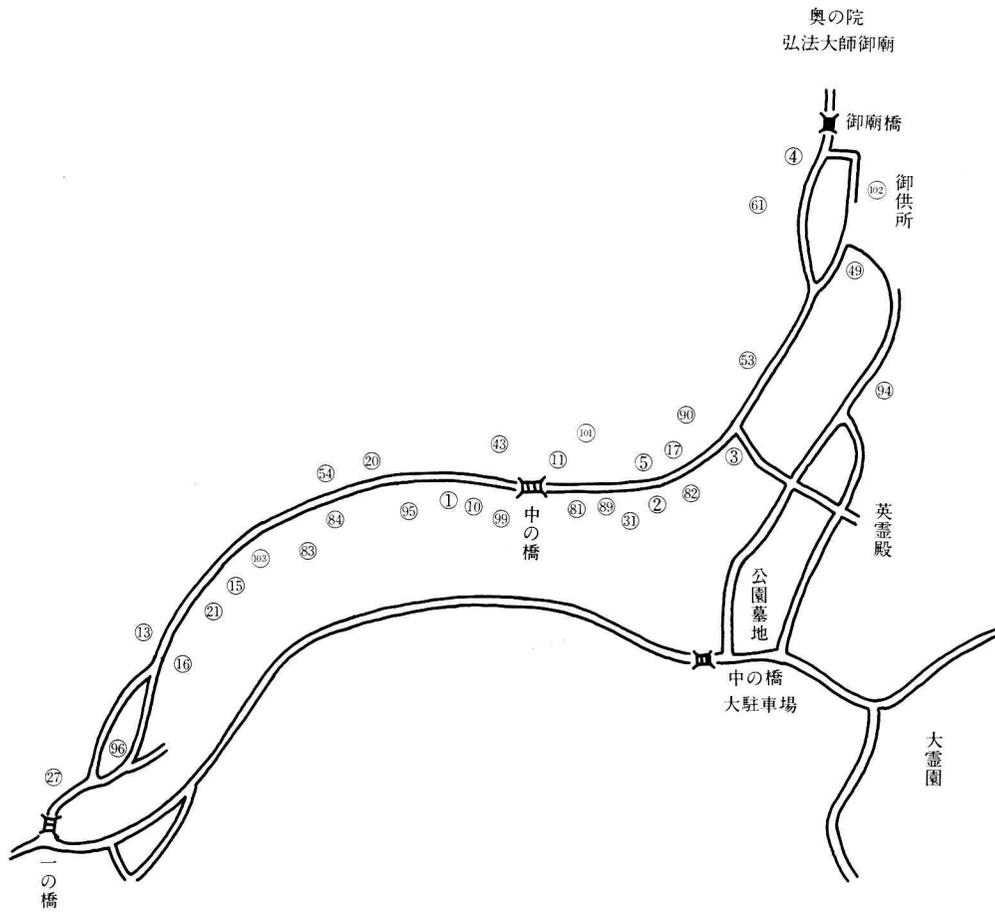


図1 高野山の会社墓略図(奥の院)

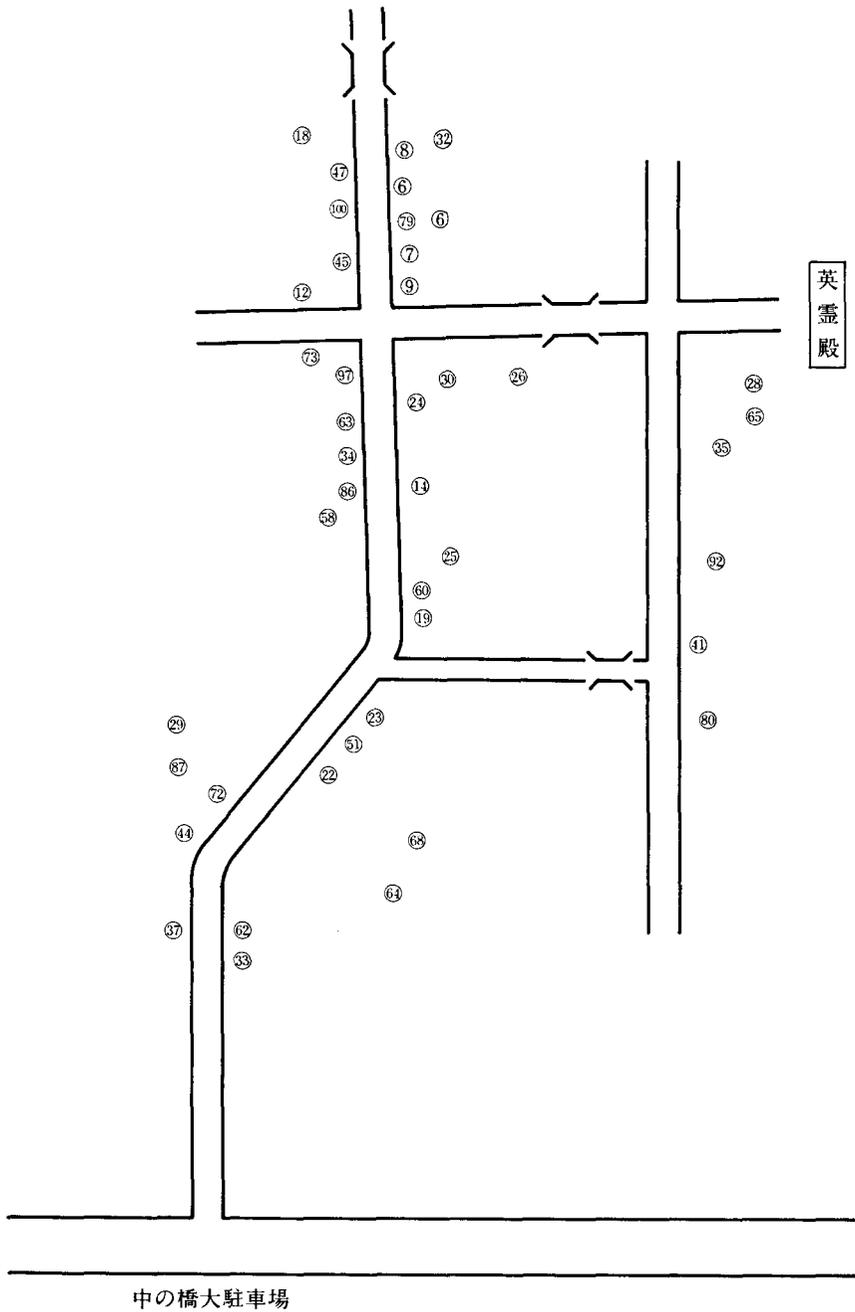


図2 高野山の会社墓略図（奥の院公園墓地）

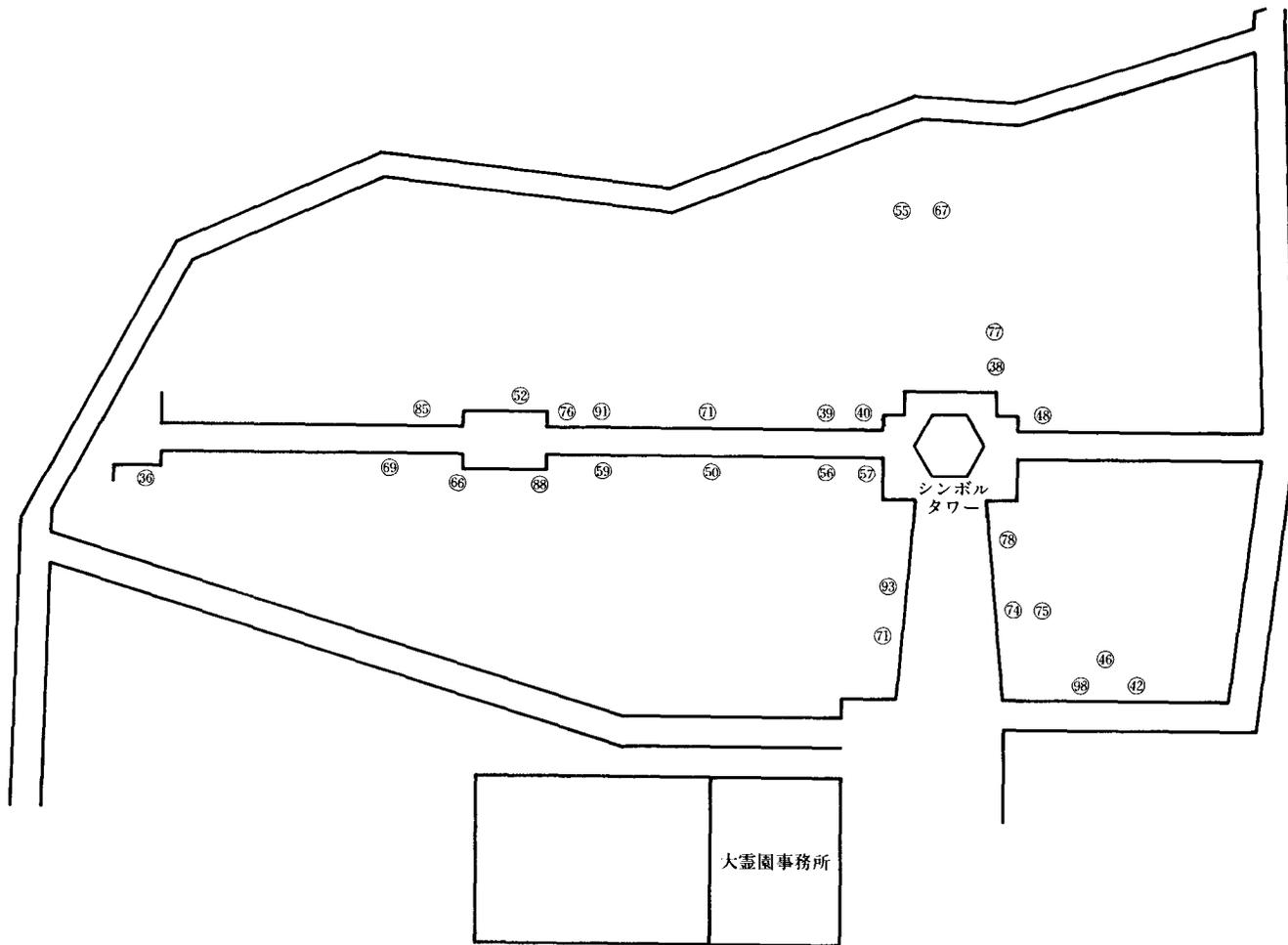


図3 高野山の会社基略図(大霊園)

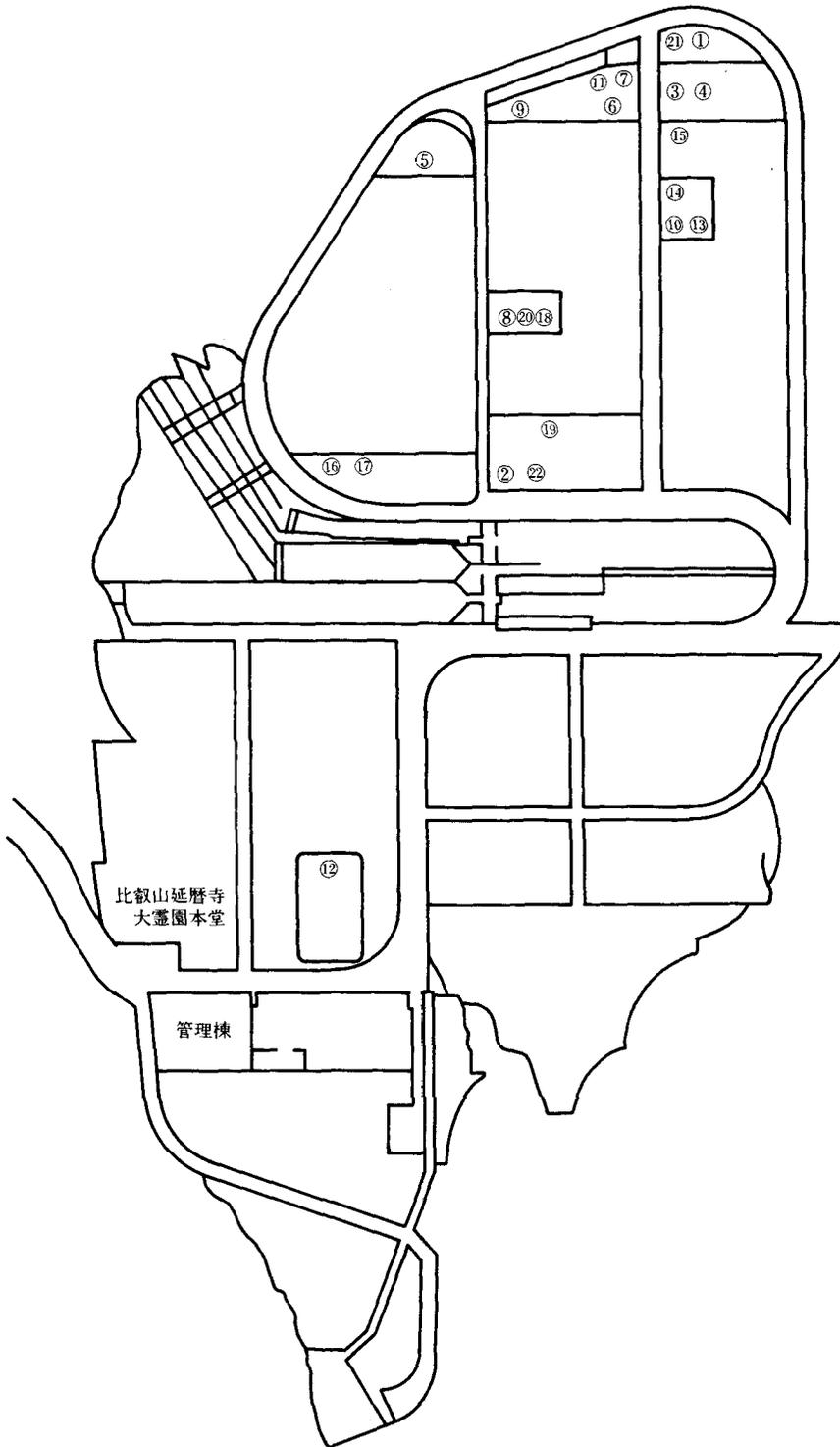


図4 比叡山延暦寺大霊園の会社墓略図

開設された。霊園内の主要道路の両側は会社供養塔ではほぼ独占されている(図3)。

比叡山では、比叡山延暦寺大霊園(以下、比叡山大霊園)が大津市伊香立上竜華町に一九七七年に造成された(写真3)。堅田から比叡山にぬける道路に沿った山の中腹にあり、全体の敷地は約六万坪である。造成の翌年には、ただちに会社供養塔が建立された。そこでは法人墓地の区画が一般墓地とは別に確保され、会社墓は図4のように分布している。墓地利用や納骨に際し、比叡山や高野山は「仏教の母山」「日本総菩提所」として宗教・宗派・国籍をとわないことをうたっている。それは会社墓の建立にとって好都合である。もっとも、法要の執行にあたるのは比叡山や高野山の僧侶であり、他宗・他派の関与は制限されている。

高野山の奥の院墓地に会社供養塔が出現したのは昭和初期である。一九二七(昭和二)年九月吉日、北尾新聞舗が家墓とともに物故店員之墓を建立している。門柱には大阪北尾家墓所ならびに物故店員之墓ときざまれている(写真4)。これまでの調査ではこれが最古であるが、無数の墓石のなかにあらたな「発見」の可能性は十分にある。しかし、初期の会社供養塔を代表するのは一九三八年九月に建立された松下電器産業の物故者墓である(写真5)。供養塔には「松下電器物故者墓」ときざまれているが、墓所の入口にある供養塔建立誌には、「永代供養塔」として言及されている。その後、戦前では一九三九年の小林薬学と一九四一年の丸善石油の例がある。久保田鉄工は一九四三年の創業者墓誌があるけれども、物故従業員供養塔が建立されたのは一九五二年である(写

真6)。戦後は、一九五〇年代から徐々にふえはじめ、その前半では大阪ガス、和泉紡績、富士車両、南海電気鉄道、その後半には写真業界、日産自動車、江崎グリコなど、関西に本社をかまえる有力会社が供養塔を建立した。そのペースは一九六〇年代の高度成長期にさらに拍車がかかり、シャープ、ヤクルト、千代田生命、三光汽船、新明和工業、仁丹などの大会社が供養塔を建て、一九七〇年代にも同様の増加がみられた。七〇年代の大手企業には東洋ゴム工業、小松製作所、浅野歯車工作所などが名をつらねている。一九八〇年代には、キンピールやスバル工業などの有名企業が供養塔を建設している。一九九〇年代になっても、供養塔造立はおとろえをみせていない。

他方、延暦寺大霊園には一九七八年に東光商事と滋賀銀行の供養塔が建立され、一九七九年には佐川急便グループと大織福祉協会の威風堂々たる供養塔がならんでそびえたった(写真7、写真8)。一九八〇年代にはいると、大阪銀行や丸大食品などがつづき、とりわけ一九八九(平成元)年になってから急増の傾向をしめしている。なお、比叡山横川^かには日本生命の慰霊塔が創業八〇年の記念事業の一環として、一九七二年に建立されている。比叡山ではこれが最初の会社供養塔である。

以上、高野山と比叡山における会社供養塔をとりあげたが、それ以外にも若干の会社供養塔が存在している。関西では、一九八八年四月、アサヒビール発祥の地、吹田工場内に「先人の碑」が建てられた。ちなみに、アサヒビールは一九八七年三月、辛口の「スーパードライ」を新発売し、低迷していたシェアを大幅にのばし、「ドライ戦争」の火つけ役

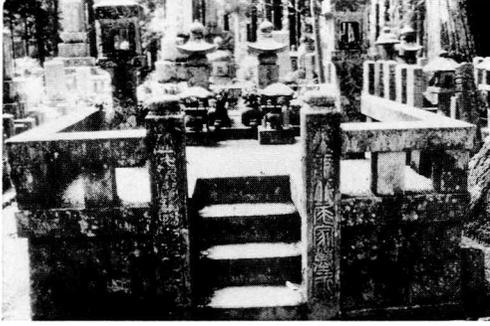


写真4 北尾新聞舗墓所。むかつて右が北尾家墓所，左が物故店員の墓

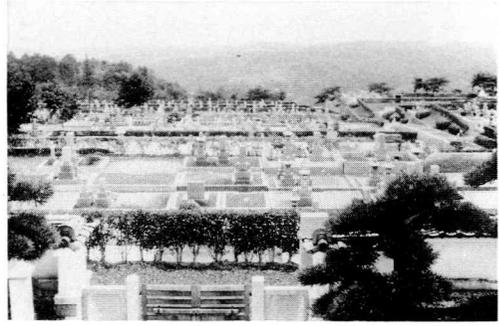


写真3 比叡山延暦寺大霊園

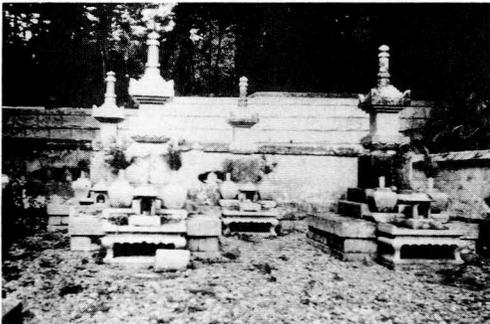


写真6 久保田鉄工墓所



写真5 松下電器の物故者墓



写真8 大織福祉協力会供養塔



写真7 佐川急便グループ供養塔

をはたした。これについてはCI(コーポレート・アイデンティティ)との関連で論じたことがある。⁽⁴⁾ 関西ではこのほか、京都の大徳寺や天竜寺、あるいは奈良の三笠霊苑にも数基の会社供養塔が存在する。⁽⁵⁾ また、池田市には山善の供養塔がある。⁽⁶⁾ 関東では、ふるくは伊勢丹社員之墓がある。これは一九一八(大正七)年に、創業者の家の菩提寺である東京日暮里の本行寺に建立されている。⁽⁷⁾ また、上野の寛永寺霊園には、向井建設が一九六九年に創業六〇年を記念してつくった「建士之墓」が存在する。⁽⁸⁾

会社供養塔の調査がさらにすすめば、もうすこし数はふえるであろうが、会社供養塔は水子供養のような全国的なブームにはなっていない。現状では、主として関西の地域的な現象として顕在化しているといつてよい。

(三) 会社の地域と業種

高野山や比叡山に会社墓をもつ会社はどのような特徴をもっているのだろうか。まず地域別、業種別に検討してみよう。ただし、現段階では、すべての会社について、その本社の所在地や事業内容を調査しているわけではないので、およその傾向が指摘できるにすぎない。

地域別にみると、高野山では関西の会社が圧倒的に多い。とくに大阪府が過半数をしめている。高野山の地元の和歌山県がそれにつづき、近隣の兵庫県や京都府の会社もめだつ。東京に本社をおく会社や全国規模の団体では、日産自動車、千代田生命、麒麟麦酒、全国建設専門工事

業団体連合会などがある。しかし、それ以外では名古屋の丸高や愛媛県の寺岡造船などわずかである。比叡山では関西以外の会社はみられない。そして高野山と同様に、大阪や神戸の会社や団体が大多数をしめるが、地元の滋賀や京都の会社もわずかにみられる。

業種別にみると製造業が圧倒的に多く、高野山では約七割に達し、比叡山でも過半数をしめている。次は商業であり、サービス業がそれにつづく。農業や漁業は極端にすくない。換言すれば、第二次産業、第三次産業、第一次産業の順となる。業界の団体は七をかぞえるが、業界をこえる親睦団体はライオンズクラブが唯一存在するにすぎない。

(四) 会社供養塔の形態

会社供養塔の形態は五輪石塔ないし五輪塔(写真9)がもっともよく、表4にみるように全体の約半数をしめる。高野山の石塔群のなかでも圧倒的に多いのがこの形態である。五輪塔は地水火風空の五輪・五大を象徴する密教的な塔であるが、平安末にあらわれ鎌倉時代に盛行をみた。高野山では江戸時代、五輪塔は武家にしか許可されず、庶民は方形無蓋塔に限定されていた。したがって、大名をはじめとする武家の供養塔はほとんどが五輪塔でしめられ、最大の高さは六メートルをこえる。⁽⁹⁾ 会社供養塔の五輪塔は標準的な正形五輪塔が大多数をしめるが、一石五輪塔もわずかに存在する(写真10)。比叡山大霊園では、会社供養塔の約三分の二が五輪塔でしめられている。

五輪塔に次いで多いのは、角石塔ないし角塔(写真11)である。高

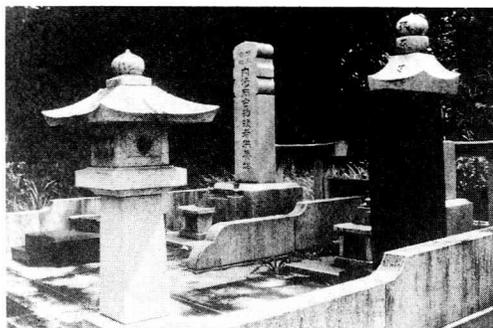


写真10 内崎商会物故者慰霊塔



写真9 雅興産並関連企業物故社員供養塔

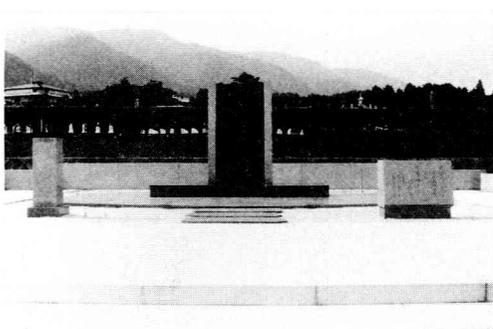


写真12 積水化学工業「先人の碑」



写真11 松下興産、並関連会社物故者之墓



写真14 小島集團物故者供養塔

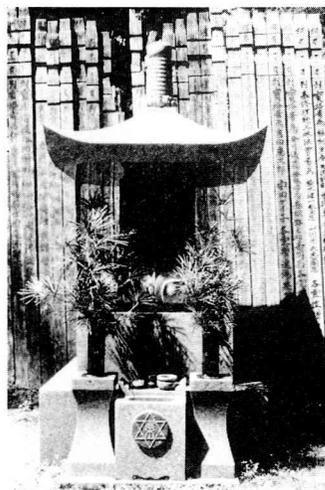


写真13 東洋紙業物故者供養塔



写真16 ドンク「先人畏敬の碑」



写真15 キヤノン「先人の碑」

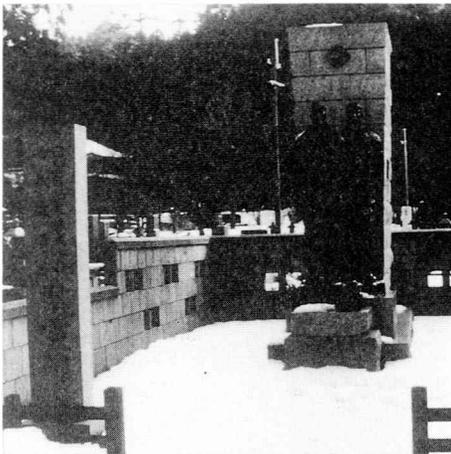


写真18 日産自動車物故従業員慰霊碑



写真17 新明和工業慰霊碑



写真20 アジア航測グループ慰霊碑



写真19 光洋精工慰霊碑

表4 会社供養塔の形態の分類

	高野山			比叡山			総計
	奥の院	大霊園	小計	横川	大霊園	小計	
五輪塔	30	15	45	0	14	14	59
宝塔	7	3	10	0	3	3	13
角塔	8	3	11	0	0	0	11
洋型	3	4	7	0	1	1	8
宝篋印塔	3	3	6	0	0	0	6
縦形	3	0	3	0	2	2	5
層塔	2	0	2	1	1	2	4
一石五輪塔	3	0	3	0	0	0	3
自然石	2	0	2	0	1	1	3

* 洋型は横形の記念碑をさす。

野山では松下電器、松下冷機、松下興産、江崎グリコ、全国建設専門工事業団体連合会などがこの形態を採用している。松下グループの松下冷機、松下興産は松下電器の形を踏襲したものであろうか。ただし、おなじ松下グループでも、松下電子応用機器の場合は五輪塔である。他方、比叡山の会社供養塔に角塔はない。六角塔も一例あるが、これも角塔に数えている。なお、縦長で横断面が方形の石塔（石碑）があり、これは縦形（写真12）としている。

角塔とおなじくらいにあるのが宝塔（写真13）である。宝塔のほかに、

宝篋印塔（写真14）、層塔（写真8）のような伝統的形態もみられる。高野山では宝塔が宝篋印塔を数の上ですこしうまわり、角塔に次いでいる。宝塔をもつ会社墓は高野山と比叡山に一三カ所みられる。屋根の四隅に突起状の独特の装飾をつけた宝篋印塔は、宝篋印陀羅尼をおさめたもので、五輪塔と同様に、鎌倉時代に普及した。高野山には六つの会社墓に宝篋印塔があるが、比叡山大霊園の会社墓にはまだ存在しない。三層塔は高野山の大阪瓦斯に唯一みられ、石の円墳の上のっている。五層塔は比叡山横川の日本生命の供養塔にのみみられない。十三層塔は高野山と比叡山に各一カ所あるだけである。

会社供養塔でひときわ目だつのは、新様式の墓碑である。まず、横長長方形の石塔（石碑）であるが、これは洋型（洋塔、洋碑）とかモニュメント型といわれている（写真15）。高野山ではシャープ、三光汽船、小松製作所、キャノンなどがこの形態を採用している。比叡山ではダイヘンにみられる。自然石を利用したものもある（写真16）。しかし、もっともユニークなのは会社のシンボルやイメージを造形表現したものである。

新明和工業はアポロ一号を形どった慰霊碑をたてている（写真17）。一九六九年の創業二〇周年がちょうど人類初の月面着陸の年にあたり、建立誌には「航空宇宙産業に連なる当社はアポロ一号を模しこの碑を制作した」とある。日産自動車は作業服姿の従業員の銅像をたてている（写真18）。光洋精工はベアリング（写真19）、アジア航測グループは三角点（写真20）、寺岡造船（写真21）は錨をそれぞれ造形化している。



写真21 寺岡造船慰霊塔



写真22 写真業界「先賢万霊之碑」

写真業界の石碑には物故者の顔写真がはめこまれている(写真22)。また、供養塔自体は伝統的な五輪塔や宝篋印塔をたて、そのほかに象徴的造形物を配している場合がある。たとえば、キリンビールはシンボルマークの麒麟の銅像をすえているし、全国箸関連業者の物故者慰霊塔の場合には、割り箸を形どった表示塔がある(写真23)。なお、これらの供養塔は人目をひくが、数の上ではおおくない。

宗派をとわず、デザインにもほとんど規制のなかった供養塔の建立に對し、一九九〇年九月、高野山真言宗宗務庁が管理規定をもうけ規制のりだしている。⁽¹⁰⁾ 今後は、あまり奇抜な会社供養塔は出現しないかもしれない。

(四) 供養塔の収納物

会社の供養・慰霊の塔や碑には、ふつう骨や髪や歯など、身体の一部はおさめられない。墓とはいっても、供養や慰霊を目的とした「詣墓」であって「埋墓」ではないからである。しかし、塔や碑には象徴的なものが収納されていることがおおい。



写真23 全国箸関連業者物故者慰霊塔

高野山でもっとも一般的なのは、物故者の霊名を刻した銅版である(写真24)。霊名版とか銘版・名版などよばれ、建立時に創業にさかのぼって記載したものをおさめ、慰霊法要をおこなうたびごとに追加していくのが慣例である。なかには経木きんぎとよばれる小型の卒塔婆をおさめているところもある。コクヨの場合には、そこに戒名と俗名が死亡年月日とともに記載されている。比叡山大霊園では木製、石製、金属製の位牌をおさめている。

モニュメント型の碑のなかにも象徴物は存在する。たとえば、高野山の千代田生命の「先人の碑」のなかには、先人の名簿が「霊名簿」としておさめられている。

例外的には納骨塔もある。大阪印刷関連団体協議会の納骨塔は高野山

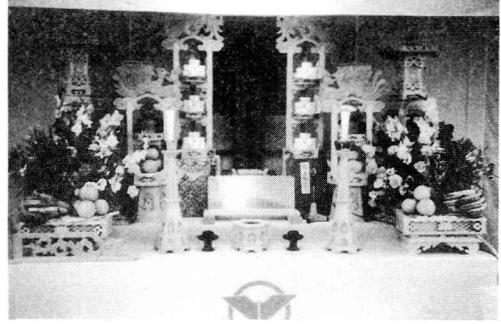


写真24 南海電鉄本社の慰霊祭用祭壇。位牌の前に過去帳と霊名版がある

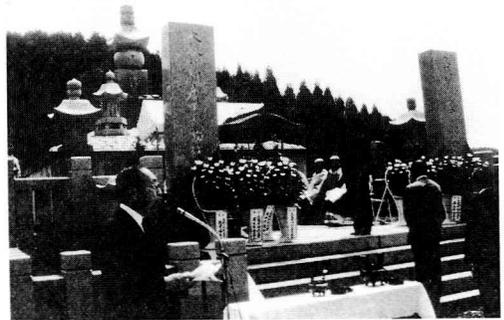


写真25 大阪印刷産業人物故者納骨塔

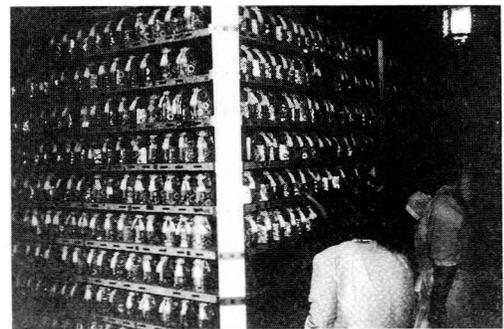


写真26 大阪印刷産業人物故者納骨塔の内部

大霊園のなかでも最大規模の建造物である(写真25)。そこには二万体の納骨が可能な空間が確保されている(写真26)。ちなみに、一九八八年五月までの統計では、三八八体が安置されている。大阪印刷関連団体協議会はまた、大阪万博時の文化展記念印刷物や篤志寄進家の履歴などをカプセルのなかに収納し、百年後にあけて写真や印刷技術の変化を探究し、さらに百年へと永遠に継承することをうたっている。

三 供養塔建立誌の分析

会社供養塔には建立誌がつくことがおおい(写真27)。「供養塔建立誌」

る感謝、③先人の霊供養、④会社発展に対する祈願、⑤安全祈願、⑥顧客への感謝、⑦高野山や比叡山の賛美である。会社による供養塔の建立はもともと物故従業員の供養・慰霊を目的としていた。そのこと是一九三八年に建立された松下電器の「供養塔建立誌」に明記されている。長文になるが、これが最古の建立誌であり、その後のひとつの典型となったので、ここに全文を掲載することにした。

供養塔建立誌

大正七年松下電器製作所創設以来熱誠ナル従業員ノ中不幸傷病ノ為メ死没セシ人々ヲ出セシコト洵ニ痛惜ニ堪ヘサル處ナリ 乃チ茲ニ千石不滅ノ霊域ニ永代供養塔ヲ建立シ是等先人ノ精霊ヲ弔フト共ニ向後不慮ノ殉職又ハ在勤中ニ死没セル人々ノ霊ヲ合祀シテ永クソノ

「供養塔建立碑文」「建立の碑」「建立の詞」「先賢の霊に捧ぐ」「物故従業員墓誌」などと記されている。表1・表2によれば、高野山では約半数の四九、比叡山大霊園では九割をこえる二〇の会社墓に建立誌がついている。碑文の表現は会社によってまちまちだが、その趣旨には共通点が見られる。それはおよそ次の七項目に分類される。すなわち、①建立の契機、②会社発展(先人)に対する

冥福ヲ祈リ祀ラントス 庶幾クハ我松下電器本社分社ノ業務ニ従事
スル人々並ニ本塔有縁ノ士ハ之是レカ建碑ノ素志ヲ諒セラレ永ク供
養セラレンコトヲ右敬ンテ誌ス

本塔建立ニ當リ舊主五代五兵衛翁ノ懇篤ナル御指導ヲ感謝ス

昭和十三年九月

松下電器産業株式会社

社主 松下幸之助

四十五歳 敬白

(一) 建立の契機

会社供養塔は会社の周年事業の一環として建立されることが圧倒的に
おおい。その例は枚挙に暇がないが、創業二〇年の会社はあたらしく、
老舗では一五〇周年の会社もある。

「創業百年を迎えるに当り」(丸正百貨店)

「第六十回創業記念日にあたり」(千代田生命)

「当社創立二〇周年に当り」(新明和工業)

「創立三十七周年を迎えるにあたり」(国華産業)

周年事業ではなく、たんに創業以来の歴史に言及したのもすくなく
ない。

「当社は明治三十二年の創業よりここに八十有余年の歴史を重ね」

(森組)

「昭和十五年初代高山松治の創業に始まり、昭和廿九年高山株式会

社を創立す。爾来三十余年」(高山株式会社)

「創業以来六十有余年」(中山製綱所)

「創立以来その発展と興隆に尽瘁せられ」(浜崎水産)

創業ではなく、社名変更の周年記念の場合もある。

「社名変更三十周年にあたり」(三光汽船)

創業者の発願を明記した建立誌もある。

「佐川急便の創立者佐川清氏の発願により」(佐川急便)

団体の協力事業を記念したものもある。

「大阪府印刷工業組合は昭和四十五年大阪に開催された『日本万国
博覧会』に協賛し、印刷文化典、国際印刷機械展を主催し、空前の
盛況をおさめたので、これを記念し、大阪印刷関連協議会の合力に
より納骨塔建立を発願した」(大阪印刷関連団体協議会)

元号が変わったことを契機としている例もひとつある。

「平成元年を機とし」(埠頭興業)

会社の製品の普及とむすびつけた稀有な例もある。

「時運に伴い社業愈々発展を遂げ吾が造るところの自動車は 全国
津々浦々に及んでその利便を普及し最近富山霊地に於てもその愛用
を見るに到った 誠に因縁測るべからざるを思う 此機会に」(日
産自動車)

(二) 会社発展(先人)に対する感謝

創業への言及につづいて、会社の発展に対する感謝を会社の先人にさ

さげている碑文がおおいが、いくつかの会社をあげるにとどめたい。

「当社ハ明治二十三年二月久保田権四郎翁ノ創メシトコロ 爾來星移リ時流レテ六十年今ヤ社業ノ基礎益々鞏固ニ社運愈々隆昌ニ赴カントス 遍ヘニコレ熱誠ナル従業員不漸ノ協力ニヨルモノニシテ洵ニ感激ニ堪ヘサル處ナリ」(久保田鉄工)

「創業以來三十年 幾多の試練に打ち勝ち 苦難をのり越え今日のアジア航測株式会社グループを築くことができましたのは 多くの先人の尊い犠牲と献身の努力によるものであります」(アジア航測)
「今日の隆盛はひとえに創業社長小森敏之氏をはじめ諸先輩ならびに全従業員の粒々辛苦と鋭意努力の賜物であります」(丸大食品)

会社以外の関係者への言及もみられる。

「幾星霜歎びと悲しみを共にご苦労になりました先賢従業員其他関係深き方々の御霊にそのご功績を讃え永く御遺徳を偲びてご冥福をお祈り申し上げます」(丸正百貨店)

「顧みるに社業今日の隆昌は廣く契約者各位の支援は固より、心魂を傾けて経営に盡瘁したる社祖以下役職員その他物故先輩の努力の賜ものに外ならず」(千代田生命)

(二) 先人の霊供養

在職中の物故従業員の霊供養がそもそも供養塔建立の眼目だった。在職中の物故者は病死と事故死と戦死をとわず、すべて供養すべき対象とかがえている会社はおおい。ただし、殉職者や犠牲者の祟りというよ

うな観念はみられない。⁽¹¹⁾

「熱誠ナル従業員ノ中不幸傷病ノ為メ死没セン人人」(松下電器)
「従業員不幸中道ニシテ傷病ノタメ物故シタル人々」(久保田鉄工)
「社運の隆盛に寄与された従業員の中で不幸にも傷病のため亡くなられた人々」(江崎グリコ)

「国家の危急に赴いて戦りくに斃れ或は傷病のため中道に物故されたもの三百餘……向後當社及び傍系会社において不幸在職中の物故者あるときは」(三光汽船)
「役員従業員中不幸にして職場に斃れ或は中途傷病のため物故せるものあり」(三和電気土木工事)

「国の基幹産業である建設業の第一線業務に身をもって貢献し、崇高な任務に殉じた方々であり、わけても身寄りの薄い不幸な方々も数多く含まれている」(全国建設専門工事業団体連合会)

「業務遂行中殉職された方々」(スバル)
「在職物故者の冥福を祈り」(新明和工業)

「在職物故者の霊を合祀して冥福を祈らんとす」(高尾企業)
しかしながら、在職物故者に限定しない会社もすくなくない。これには二種類ある。物故役職員のみとするか、物故者全体とするかでわかれるのである。

まず物故役職員を対象とする会社には、和歌山県商工信用組合、PA R I S、浜崎水産などがある。供養塔碑文をかかげていない南海電鉄もそのひとつである。

「創業以来その発展興隆に尽瘁せられ不幸他界された組合役職員」
(和歌山県商工信用組合)

「P A R I S 関連企業の発展に寄与された物故役職員」(P A R I S)
「不幸にして他界された会社役員各位」(浜崎水産)

物故者一般をまつる会社はおおい。久保田鉄工所の次にふるい建立誌は一九五七年の日産自動車であるが、そこでは「当社物故者各位の霊を慰びその霊を慰めるために碑を建てる」とみえるだけである。一九六四年のヤクルトや千代田生命も同様に在職中の物故者、すなわち「殉職者」にはこだわっていない。そのほかの会社のももいくつかあがるが、最近はこのような会社がおおい。これは「英霊祭祀」から「先祖祭祀」への重点の移行として解釈できる。⁽¹²⁾

「ヤクルト業界に従事していた物故者の御霊」(ヤクルト)

「社祖以下役員その他物故先輩」(千代田生命)

「先人の足跡を偲び……その霊を慰めようとする」(アジア航測)

「創業社長北川富三郎氏をはじめ諸先輩ならびに全従業員……物故者各位の功績を讃え」(旭)

「興隆発展に尽力された物故者各位」(三星堂)

退職後の物故者にたいして、碑文で言及した例はひとつしかない。それは一九六四年の久保田鉄工の碑にみえる。

「在職中ニ物故セシ者ノミナラズ更ニソノ生涯ノ大半ヲ当社ニ勤務シテ社業ノ発展ニ貢献シ停年或ハ之ニ準ズル事由ニヨリ円満退職シタル後他界セシ人々ノ霊ヲモ合セ祀リ永クソノ冥福ヲ祈ルモノナ

リ」(久保田鉄工)

しかしながら、実際には退職後の物故者を合祀している会社はすくなくないと推測される。たとえば、松下電器は一九七八年の創業六〇周年を機に、定年退職の物故者をもまつるようになった。それは松愛会という退職者の親睦団体の重要な活動のひとつとなっている。日本生命でも定年退職後の物故者を霊名簿登載の基準のひとつとしている。そこでも喜楽会という退職者の親睦団体の会員が対象となっている。これらの親睦団体の代表者が慰霊法要に参列することはいうまでもない。これも「先祖祭祀」化の傾向のひとつのあらわれである。

ところで、「有縁」「縁り」など「縁」をもちいた表現もときどきみられる。

「創業以来業績発展に尽力し幽明境を異にされた当行有縁の方々」

(滋賀銀行)

「創業以来茲に五十年 縁ありてミノルタと共に歩まれし先賢の霊」

(ミノルタ)

「大阪印刷業界に縁りのある経営者をはじめ、社員や家族の遺骨を安置し」(大阪印刷産業人物故者納骨塔)

縁は会社だけでなく、関連会社や協力会社の物故者にまで範囲を拡大している。高野山では、藤井毛織や和歌山湊組関連企業や小島集団などの企業グループの場合はその典型であるが、コクヨは第一次取次問屋の社長名を霊標にきざんでいる。さらに、高野山では三和電気土木工事、比叡山大霊園では建設会社の森組などが、協力会社の殉職者を祭祀の対

象者にくわえている。

「今後当社および協力会社において不幸にして物故者あるときは」
(三和電気土木工事)

「今後も当社並びに関係会社において物故者のあるときにはその霊
を合祀し」(森組)

(四) 会社発展に対する祈願

供養塔建立はほんらい在職の物故従業員の供養を主たる目的としていたが、あわせて会社の発展を祈願する例はきわめておおい。松下電器をはじめ、久保田鉄工、江崎グリコ、日産自動車、ヤクルト、千代田生命などの初期の供養塔の建立誌には、会社の発展祈願はまったく明記されていない。高野山で会社の発展祈願を刻した初期の建立誌には、一九六九年の新明和工業のものがある。

「併せて社運の繁栄を希念する」(新明和工業)

そのほかの表現例をいくつか列記してみよう。

「社業の発展を祈念する」(そごう、中山製綱所)

「斯業をお護り下さい」(アジア航測)

「社運の隆昌とこしなえに泰からんことを眞護し給え」(ミノルタ)

比叡山大霊園の建立誌は二〇あるが、そのうち一一の碑文に発展祈願がみられる。「あわせて社業の発展を祈願する」という文面がおおく、社業は社運や業界、発展は繁栄や繁盛や飛躍発展、祈願は祈念という文句と互換性をもっている。すこしかわったところでは、「社業隆昌を旨

に」(高山)という表現がある。なお、発展祈願を明記していない建立誌の九例についても、物故者が発展、隆昌に尽力したことに言及しているものは七例におよび、供養塔建立と発展が密接不可分の関係にあることがわかる。このことから、会社自体の発展や繁栄が強調される傾向にあることが看取できるであろう。

(五) 安全祈願

発展祈願にごく稀に言及されるのは安全祈願である。物故従業員を殉職者ないし犠牲者とみなすことは、とくに事故死の場合に歴然としている。まず、高野山の事例をあげてみよう。

「今後建設業の労働災害の絶滅が期されるよう」(全国建設専門工事
業団体連合会)

「今後不慮の災禍の絶滅を期し」(兵庫県漁協)

「社員の安全を祈念する」(キャノン)

「当社並びに従業員各位の安全を祈願するものである」(小松製作所)
直接に安全を祈願したものではないが、つぎのような例もある。

「従業員の健勝を祈念する」(高尾企業)

比叡山では、二〇の建立誌のうち二つだけである。

「役職員の安全を祈願する」(森組)

「関係各位の安全を祈願する」(大織福祉協力会)

数はすくないが、建設業や製造業や漁業など、事故死の危険性の高いところに安全祈願がみられる。

(六) 顧客への感謝

PR効果を多少意識してのことかもしれないが、顧客への感謝を表明している建誌がある。高野山には二例みられるが、比叡山大霊園にはそのような趣意はきざまれていない。

「契約者各位の支援は固より」(千代田生命)

「県民、市民の絶大な信頼とご愛顧を頂き」(丸正百貨店)

会社供養塔は会社の宣伝効果をねらったものではないから、顧客への感謝がなくて当然である。しかしながら、高野山では参道の協や大霊園のメインストリートに立地しているので、間接的には会社のPR、ひいては威信や名声を高める効果があるかもしれない。

(七) 高野山や比叡山の賛美

高野山や比叡山はながく日本の仏教の一大センターとして機能してきた。ここに墓をもつことは、会社にとって、威信や名声を高めこそすれ、そこなうことはないはずである。そのせいか、高野山や比叡山を賛美した形容が随所にみられる。まず、高野山の場合をとりあげよう。

「高野山に千百五十年前、弘法大師の開山で奥ノ院の参道には老杉、巨木が鬱蒼と聳え、その左右に皇室の御廟、織田、豊臣、徳川三代にわたる諸国の大名、近世知名人の墓碑が立ち並び全国唯一の霊場で納骨塔建立には至上の地である」(大阪印刷関連団体協議会)

「千古不滅の霊域」(松下電器)

「千古の霊山高野山奥之院の浄域」(高尾企業、三和電気土木工事)

「霊峰高野山に聖地をもとめ」(佐々木工業)

「高野山の浄域」(コクヨ)

「高野山の聖地」(そごう)

比叡山も大同小異である。

「千古の霊地比叡山延暦寺大霊園の浄域」(滋賀銀行)

「比叡山延暦寺大霊園の浄域」(大阪銀行、大三織物、三星堂、ダイ

ヘン)

「比叡山延暦寺の聖地」(森組)

「此の聖地浄域」(東光商事)

聖地、浄域、霊域、霊地などの形容が一般的であり、「浄土」という表現はみられない。高野浄土の伝統は納骨や納髪にのこっているが、魂の安住する浄土という意識は会社供養塔には希薄である。

四 会社の追悼儀礼

会社供養塔における追悼儀礼は「追悼法要」「慰霊祭」などとよばれる。時期はふつう春から秋にかけて、会社あるいは墓地で恒例行事として実施される。高野山では供養塔建立の日付を調査してみると、四月から十一月までがほとんどであり、雪におおわれる冬季をさげていることがわかる。比叡山でも二月の例は二つしかない。

その追悼法要の実態については、すでに松下電器、南海電鉄、秩父セ

メント、ならびに大阪印刷関連団体協議会に關して報告をおこなっている。(13) ここではそれ以外の会社としてコクヨと千代田生命をとりあげ、その概要を報告したうえで、若干の比較考察をすすめることにしたい。

(一) コクヨ株式会社

コクヨは事務用品の大手メーカーである。本社は大阪にある。物故者慰霊塔は一九七四年八月二〇日に創業七〇周年を記念して大靈園に建立された。建立誌には次のようにみえる。

明治三十八年黒田善太郎が黒田表紙店を創業して以来業容の発展にともなつて社名を黒田國光堂 コクヨ株式会社と改めてここに創業七十周年を迎えた 今日益々社業の隆盛をみているのは創立者を初め諸先輩が事業一途に尽力された賜ものであるが その間不幸にして多くの人材をうしなつたことは誠に痛惜に堪えない
ここに高野山の淨域を選んで慰霊塔を建立し コクヨの発展に尽くされた物故者の御霊を合祀して 永遠にその功をたたえ冥福を祈らんとするものである

一九八七年八月二〇日、一時三〇分から天徳院で法要があり、昼食をはさんで午後一時すぎに大靈園での法要が開始された(写真28)。導師は天徳院の住職がつとめ、従僧が一名ついていた。参列者は会長、労働組合代表、遺族ら二〇名であり、その順番で焼香がおこなわれた。それから五輪塔の基部をあげ、卒塔婆ににた経木をおさめた。僧侶が退席



写真27 滋賀銀行の建立誌



写真28 コクヨの物故者追悼儀礼

したあと、遺族代表の挨拶があり、三〇分ほどで終了した。最後にシンボルタワーの前で記念撮影をおこない、解散した。
コクヨは二百名をこえる物故者をまつているが、対象は定年退職者ならびに在職中の物故者にかぎられる。それらの人々の名は慰霊塔のかたわらにある靈標にも刻されている。靈標は二基あり、ひとつは従業員、もうひとつは第一次取次間屋社長を対象としている。ただし、後者の会社による参拝はすくないという。

(二) 千代田生命保険相互会社

千代田生命は日本有数の生命保険会社である。本社は東京にある。千代田生命の「先人之碑」は一九六四年四月一五日、第六〇回創業記念日

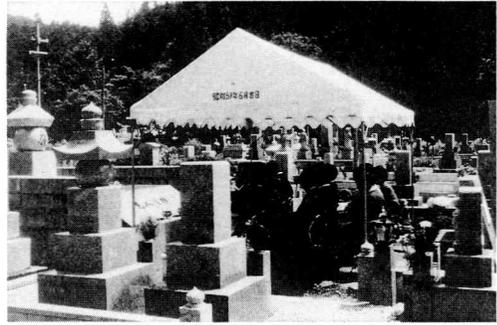


写真29 千代田生命の物故者追悼儀礼

に公園墓地に建立された。碑文には次のように刻まれている。

明治三十七年四月十五日 門野
幾之進千代田生命保険相互會社
を興してより、ここに六十年周
を迎う

顧みるに社業今日の隆昌は廣く
契約者各位の支援は固より、心
魂を傾けて経営に盡瘁したる社
祖以下役職員その他物故先輩の
努力の賜ものに加えならず

第六十回創業記念日にあたり、これら先人の支援と功労とに感謝の意を表し、その遺徳をしのび、ここに碑を建て、謹んで冥福を祈るそこにはこれら先人の名が「靈名簿」に記載されておさめられている。

一九八七年八月二日午前十一時〇五分、竜光院の導師ら四名の僧侶が到着し、大阪本部長ほか一〇名の参列者とともに法要がはじまった(写真29)。参列者全員による焼香のあと導師が追悼の文句をとなえた。最後に導師による五分たらずの説教があり、所要時間四五分で終了した。遺族の参列はなかった。

(三) 若干の比較

以上二つの会社の供養儀礼を紹介したが、これに松下電器、南海電鉄、

ならびに大阪印刷関連団体協議会の場合をくわえ、若干の特徴を整理してみた。

まず法要の場所と重要性をみると、千代田生命と大阪印刷関連団体協議会は供養塔での法要を重視し、松下電器は供養塔よりも菩提寺での法要におもきをおいている。南海電鉄は本社での慰霊祭のほうで、高野山の供養塔よりもはるかに規模がおおきい。コクヨは菩提寺と供養塔の法要が一連のものとなっている。

導師や僧侶の数も会社によってことなる。導師は大阪印刷関連団体協議会は管長クラス、南海電鉄は宗務総長クラス、他は菩提寺の住職となっている。僧侶の数も二名から一二名にわたっている。

参列者の筆頭は大坂の会社・団体の場合は社長・会長であるが、東京に本社のある千代田生命は大阪本部長であった。遺族の参加が一般的であるが、千代田生命のように出席しない場合もある。焼香の順序をみると、主催者を代表する社長・会長が最初である。ふつう遺族は代表か全員かは別にしてその次となるが、コクヨでは労働組合代表が遺族の前に焼香した。しかし参列者がすべて焼香することは共通している。

社長・役員などの会社幹部ばかりでなく、労働組合の代表も参加することはひとつの特徴である。南海、松下、コクヨの場合には、部課長に先だち、会社幹部につぐ序列である。ただし、大阪印刷関連団体協議会は経営者のみの会員で構成されるため、従業員はふくまれない。

五 今後の課題

会社墓や会社供養塔の研究はようやく着手された段階にある。これまで新聞記事や雑誌記事でしばしばとりあげられることはあっても、本格的な研究対象にはなっていない⁽¹⁴⁾。そのため本稿では、高野山と比叡山の場合をとりあげ、基礎的なデータの提出をおこない、建立誌の分析と追悼儀礼の比較に関する若干の考察をこころみ⁽¹⁵⁾た。その一方、会社供養塔を大名供養塔と比較し、前者を後者の延長線上にとらえる視点を提出した⁽¹⁶⁾。また、柳田国男が指摘したかつての「家永統の願い」⁽¹⁷⁾にかわって、いまや「会社永統の願い」が会社供養塔の建立をはじめ社史編纂やCI運動にみられることに注目したことがある⁽¹⁸⁾。

今後の課題は、まず第一に、会社供養塔建立の動機や経緯について、直接インフォマントから事情を聴取し、できるだけなおおくの会社についての基礎的データを蓄積することである。これは関西が中心となるが、他地域の散発的事例のデータ収集も必要である。第二は、儀礼的脈絡のなかで会社の墓や供養塔を位置づけることである。それは、会社が主導権を發揮する、いわば「会社教」の世界の解明につながっていく⁽¹⁹⁾。「会社教」は日本で独特の発達をとげたものであり、関西にかぎらない。あわせて、会社員やその家族の意識をさぐることも重要な課題である。こうした研究は「会社主義」社会としての日本の社会的性格の理解に一石を投ずるであろう⁽²⁰⁾。第三には、日本の「会社主義」と他国や他地域の会社

のあり方を比較する視点である。ブラジルやヨーロッパとの比較はすでに多少こころみ⁽²¹⁾たが、韓国との比較も興味ぶかい。なぜなら、高野山には韓国系実業家によって建立された巨大墳墓があり、そこでは会社よりも家族・一族がはるかに重要な意味をもっているからである。いずれにしても、会社墓や会社供養塔をはじめとする「会社教」や「会社主義」の研究は、ほとんど未開拓の分野であるだけに、今後さまざまな困難をのりこえていかなければならないであろう。

註

- (1) 宇野正人『企業の神社』神社新報社、一九八六年。
- (2) 学校法人関係には清風学園、甲子園学園、杉野学園、横浜明倫学園などがあり、家元関係では花柳一門慰霊塔がある。
- (3) 広大な墓地のことゆえ、若干の調査もれはあるかもしれない。組の場合、会社かどうか不詳のものがいくつかあった。また、墓地を確保した段階の会社や建設中の墓は除外した。
- (4) 中牧弘允『むかし大名、いま会社——企業と宗教』淡交社、一九九二年、四六一—五〇頁。
- (5) 久保田茂多呂『世にも不思議なお墓の物語』宗教法人天国教会、一九六九年(増補改訂版)、一三三—一四一、一四三—一四四頁。
- (6) 山善ならびに関係会社の物故者の慰霊のため、一九八二年三月、池田市畑の長楽寺境内に建立された。
- (7) 出口健五氏の教示による。
- (8) 前掲拙著、二二—二四頁。
- (9) 一番石とよばれる崇源院殿(徳川秀忠夫人)の墓塔。
- (10) 墓地永代使用権の譲渡禁止、面積は個人は八霊地(約六・六平方メートル)、寺院は一六霊地(約一三・二平方メートル)以内、墓石・植木の高さは約二メートル以内、納骨堂・仏舎利塔の設置禁止、設計書の提出義務などを内容とするという。『朝日新聞』(大阪)一九九〇年九月六日。『読

- 売新聞』(和歌山)一九九〇年九月一七日。
- (11) 前掲拙著、二二―二五頁。
- (12) 前掲拙著、四〇―四六頁。
- (13) 前掲拙著、五五―七九頁。
- (14) 目にふれた範囲での記事には次のようなものがある。
柴田俊治「高野山公園墓地にみる墓碑の造形」『石塔工芸』、一九八一年三月号、二六―二九頁。
「入社から墓場まで……企業の墓で社員供養」『日本経済新聞』(東京)、一九八九年三月一四日。
山口文憲「高野山 本場の墓場」『芸術新潮』、一九八九年八月号、六五―七四頁。
- (15) 学術的な言及には次のようなものがある。
井上忠司「社縁の人間関係」栗田靖之編『日本人の人間関係』ドメス出版、一九八七年、二四六―二四七頁。
筆者の記事、論文、著書などは次のとおりである。
「高野山の会社供養塔」『宗教研究』二七五号、一九八八年三月三十一日、三〇五―三〇六頁。
「むかし大名、いま社長」『東洋学術研究』二八巻一号、一九八九年二月二八日、一五二頁。
「お墓の名刺受け」『信濃毎日新聞』、一九八九年三月二八日(『宗教に何がおきているか』平凡社、一九九〇年、所収)。
「会社供養塔」『信濃毎日新聞』、一九八九年六月二七日(前掲拙著、一九九〇、所収)。
「天国への企業進出」『月刊みんぱく』一九九〇年四月号、千里文化財団(拙著、一九九二、所収)。
「むかし大名、いま会社」『毎日新聞』(大阪)、一九九〇年八月二三日。
“Religious Civilization in Modern Japan: As Revealed through a Focus on Mt. Koya”, Tadao Umesao, Helen Hardacre, Hirochika Nakamaki (eds.) *Japanese Civilization in the Modern World VI Religion, Semi Ethnological Studies* no. 29, National Museum of Ethnology, 1990. (『近代日本の宗教文明——投影装置としての高野山を中心』梅棹忠夫・中牧弘允編『宗教の比較文明学』春秋社、一九九三年、二六三―二八三頁)。
「現代『会社教』時代」『月刊住職』一九九一年三月号、金花舎(拙著、一九九二、所収)。
「会社永続の願い」石毛直道編『昭和の世相史』ドメス出版、一九九三年(拙著、一九九二、所収)。
『むかし大名、いま会社——企業と宗教』淡交社、一九九二年。
- (16) 前掲拙著、一九九二、八一―九〇頁。
- (17) 柳田国男『明治大正史世相篇』(下)、講談社、一九七六年(原著一九三〇年)、六一―八八頁。
- (18) 前掲拙著、三一―五三頁。
- (19) 会社教については、前掲拙著、五四―七九頁、参照のこと。
- (20) 会社主義については、前掲拙著、七一―三頁、参照のこと。
- (21) 前掲拙著、一一三―一四〇頁。
- (国立民族学博物館 国立歴史民俗博物館共同研究員)

Company Graves on Mt. Kōya and Mt. Hiei

NAKAMAKI Hirochica

Some Japanese companies not only hold company funerals and memorial services for their deceased employees, they also have their own graves. These graves are called company graves or corporate graves, and many of them are constructed on Mt. Kōya or Mt. Hiei. This paper looks at 103 company graves on Mt. Kōya and 23 on Mt. Hiei, and aims mainly to provide basic data on them and to indicate future questions to be answered.

In the company grave compound, are usually erected the graves of the founders and monuments for the repose of deceased employees' souls. In this paper, the author focuses mainly on the towers for the repose of deceased employees' souls, and attempts to trace their history and to analyze the names and forms they take. Furthermore, this paper also refers to the area where the companies or unions that constructed these monuments are located, which is mostly the Kansai District, together with their lines of business.

Since notes on the erection of the monuments are often inscribed, the author has classified the motives for their construction into seven headings, and analyzed them. These headings are: (1) Momentum behind construction, (2) Gratitude for the expansion of the company (or to the predecessors), (3) Prayer for the repose of the predecessors' souls, (4) Prayer for the expansion of the company, (5) Prayer for safety in business, (6) Gratitude toward clients, and (6) Praise to Mt. Kōya or Mt. Hiei.

Concerning memorial services for deceased employees connected with the memorial monuments set up by companies, the author takes up the examples of Kokuyo Co., Ltd. and Chiyoda Mutual Life Insurance Co., and attempts to make some comparison between them.